

新国立劇場 開場20周年記念公演
新国立劇場 2017/2018 シーズンオペラ

細川俊夫／サシャ・ヴァルツ

松風

Matsukaze

新制作・日本初演

2018 年 2 月 16 日(金)～18 日(日) 会場:新国立劇場オペラパレス
【2017 月 10 月 7 日(土)前売開始】



「松風」モネ劇場公演より Photo:Bernd Uhlig

現代音楽をリードする作曲家・細川俊夫のオペラが新国立劇場初登場

世界の現代音楽シーンをリードする作曲家として、欧米の主要なオーケストラ、音楽祭、劇場からの委嘱作品が次々と上演されている細川俊夫。オペラの舞台上演が東京で行われる見逃せない機会です。自然、祈りと鎮魂というテーマが能を下敷きに描かれる『松風』が、細川俊夫の真髄を伝えます。

細川俊夫×サシャ・ヴァルツ、音楽と身体が交錯するコレオグラフィック・オペラ

『松風』は細川俊夫と、世界有数のコンテンポラリーダンスの振付家サシャ・ヴァルツのコラボレーションにより誕生した“コレオグラフィック・オペラ”。幽玄の美を描く細川俊夫の音楽、舞踊と声楽が一体となったサシャ・ヴァルツの演出、さらに現代美術家・塩田千春ならではの大規模なインスタレーションが融合した、大スケールのアートです。2011 年モネ劇場で初演後、世界各国で上演、大きな反響を呼んだ傑作が、いよいよ東京に上陸、全てのアートファン必見です。

＜資料・写真のご請求、ご取材のお問い合わせ＞
新国立劇場 制作部オペラ 広報担当 高梨木綿子
Tel:03-5352-5733 / Fax:03-5352-5709
E-Mail: takanashi_y2525@nntt.jac.go.jp

新国立劇場 開場 20 周年記念公演
新国立劇場 2017/2018 シーズンオペラ

松 風

全 1 幕〈ドイツ語上演／字幕付〉

初演: 2011 年 5 月 3 日／ベルギー王立モネ劇場(ブリュッセル)

作曲: 細川俊夫 台本: ハンナ・デュブゲン(世阿弥の同名の能に基づく) 演出・振付: サシヤ・ヴァルツ

現代音楽をリードする作曲家・細川俊夫のオペラが新国立劇場初登場

ドイツを拠点に世界的に活躍する作曲家細川俊夫のオペラが新国立劇場初登場。細川は現代音楽をリードする作曲家として、欧米の主要なオーケストラ、音楽祭、劇場からの委嘱作品が次々と上演されており、日本国内でも管弦楽曲や室内楽、器楽、声楽曲が数多く紹介されています。しかしオペラの国内舞台上演は極めて少なく、東京でのオペラ上演は『リアの物語』(1999 年／東京文化会館)、『班女』(2009 年／サントリーホール)、『大鴉』(2014 年／津田ホール・コンサート形式)が数えられるのみであり、待望の上演となります。

近年の細川は、人と自然の関わりを見つめ直し、祈りと鎮魂としての音楽を書き続けています。また『班女』以来、能を下敷きとしたオペラを繰り返し作曲しています。オペラ『松風』は、報われなかった愛のため亡霊となった女が狂おしく舞うという筋立ての能『松風』の幽玄の世界が、細川の手により“魂の浄化”という普遍的なテーマをもつオペラ作品として昇華し、世界各国で高い評価を得ています。

細川俊夫×サシヤ・ヴァルツ、音楽と身体が交錯するコレオグラフィック・オペラ

『松風』は細川俊夫と、振付家サシヤ・ヴァルツのコラボレーションにより誕生した“コレオグラフィック・オペラ”。能の古典『松風』をもとに若手作家ハンナ・デュブゲンがドイツ語台本を書き下ろし、細川によって1幕5場のオペラに仕立てられました。サシヤ・ヴァルツは、ドイツ・ダンス界を代表する世界有数の振付家で、古代の二人の女性の運命を描いたオペラ『ディドとエネアス』(05 年)や『メデア』(07 年)を既に発表し、音楽と舞踊、声楽が一体となったコレオグラフィック・オペラという様式を確立しています。サシヤ・ヴァルツ演出・振付『松風』は、ベルギー王立モネ劇場、ルクセンブルク大劇場、ポーランド国立歌劇場との共同制作、ベルリン州立歌劇場の協力により 2011 年に初演され、その後フランス、香港と上演を拡大しています。自然と幽玄を描く細川の音楽、舞踊と声楽が一体となって表現されるサシヤ・ヴァルツの斬新な演出によって、「80 分があまりに早く過ぎてしまった」(フィナンシャルタイムズ)と絶賛されました。初演したモネ劇場は『松風』をはじめとする意欲的なプログラムにより同年の「Opernwelt」誌の最優秀歌劇場に選出されています。

世界で活躍する現代美術家・塩田千春のインスタレーションによる壮大な美術

このプロダクションの大きな見どころのひとつが、ドイツを拠点に世界的に活躍する現代美術家・塩田千春のインスタレーション(立体作品を空間に置き、その配置や変化を含め空間そのものを作品とみなす美術手法)による舞台美術。塩田は生と死という根源的な問題に向き合い、空間に張り巡らせた糸や、ドレス、靴、ベッドなどの人々の生活の痕跡や記憶を内包する素材を用い、見る者の感覚に直接訴えかける作品を精力的に発表しています。『松風』では舞台美術家ピア・マイヤー＝シュリーヴァーとの共同作業で、劇場という巨大な空間に黒い毛糸を張り巡らし、死者と生者を自在に行き来させる効果的な舞台美術を制作しました。圧倒的に雄弁な舞台美術は、それ自体が塩田千春ファンには見逃せないばかりでなく、音楽、舞踊、美術が一体となって現出する『松風』という総合芸術として、全アートファン必見の作品といえるでしょう。

細川俊夫を熟知した現代音楽の精鋭が出演

日本初演となる今回の上演では、声楽、演技ともに難役である松風、村雨の姉妹役にイルゼ・エーレンス、シャルロッテ・ヘッレカント、旅の僧にグリゴリー・シュカルパが出演、指揮はデヴィッド・ロバート・コールマンが務めます。初演以来村雨役を歌い続けているヘッレカントをはじめ、作曲家の厚い信頼を得ている現代音楽の精鋭ぞろいです。須磨の浦人役には萩原潤が、ヴォーカル・アンサンブルには新国立劇場合唱団の選りすぐりのメンバーが出演します。また、ダンスはサシヤ・ヴァルツ&ゲッツが出演。およそ 10 年ぶりの待望の来日となります。

■『松風』ものがたり

【海】秋の夕暮、旅の僧が須磨の浦を訪れる。僧は、松風・村雨という女の名と詩が記された札の付いた一本の松に目を留める。土地の者にいわれを尋ねると、数百年前、松風・村雨という名の貧しい汐汲み女の姉妹が在原行平を愛したが、帰京した行平がほどなく没し、姉妹の思いは成就しなかったのだという。僧は読経して松を弔う。

【汐】浜の小屋で夜を明かそうと小屋の主を待つうち、汐汲み女の姉妹が現れる。姉妹は汐汲みの仕事と行平への思いに憑かれながら、月明かりの下で汐を汲む。

【暮】僧が宿泊を願い出ると姉妹ははじめ断るが、相手が僧と知って承諾する。一陣の風が吹き、行平の詩を思い起こさせる。気の昂ぶった姉妹は涙ながらに、3年間共に暮らした後、都へ召喚されてすぐ突然亡くなった恋人へ寄せる思慕の念を語る。僧は目の前の二人こそ松風・村雨の霊だと気付く。二人は僧に、魂の平安を祈って欲しいと請い願う。

【舞】松風は行平の形見の狩衣と烏帽子を身につけ恋心を募らせ、浜の松の木を行平と間違え、ついに半狂乱となる。姉妹の叫びが風雨と共に響く。

【暁】僧が目覚めると、小屋も姉妹も姿を消しており、ただ松を渡る風だけが残るのだった。

<主要キャスト・スタッフプロフィール>

【作曲】細川俊夫

HOSOKAWA Toshio

1955年広島生まれ。1980年、ダルムシュタット国際現代音楽夏期講習に初めて参加、作品を発表する。以降、ヨーロッパと日本を中心に作曲活動を展開。欧米の主要なオーケストラ、音楽祭、オペラ劇場等から次々と委嘱を受け、国際的に高い評価を得ている。2004年のエクサンプロヴァンス音楽祭委嘱による2作目のオペラ『班女』、05年のザルツブルク音楽祭委嘱のオーケストラ作品『循環する海』（世界初演＝ウィーン・フィル）、第5回ロシュ・コミッション（2008年）受賞による委嘱作品である10年初演のオーケストラのための『夢を織る』（クリーヴランド管弦楽団によって、ルツェルン音楽祭、カーネギーホール等で初演、13年英国作曲家賞受賞）、11年のモネ劇場委嘱によるオペラ『松風』（演出＝サシャ・ヴァルト）、ユナイテッド・インストゥルメンツ・オブ・ルシンの委嘱によるモノドラマ『大鴉』、ベルリン・フィルハーモニー管弦楽団とバービカン・センター、コンサート・ヘボウの共同委嘱による『ホルン協奏曲―開花の時―』といった作品は、大野和士、準・メルクル、ケント・ナガノ、サイモン・ラトル、ロビン・ティチャークティ、フランチ・ウェルザー＝メストなどの指揮者たちによって初演され、レパートリーとして演奏され続けている。13年のザルツブルク音楽祭では、同音楽祭委嘱作品、ソプラノとオーケストラのための『嘆き』の初演をはじめ、『古代の声』（アンサンブル・ウィーン＝ベルリン委嘱作品）初演のほか、多くの作品が演奏された。14年、トランペット協奏曲『霧のなかで』（サントリー芸術財団サマーフェスティバルで初演）で3度目の尾高賞を受賞。近年、人と自然の関わりを見つめ直し、祈りと鎮魂としての音楽を書き続けており、14年には『アイオロス』『フルス』といった協奏曲や歌曲『3つの天使の歌』などが欧州で初演され、15年には2人のソプラノとオーケストラのための『嵐のあとに』（東京都交響楽団創立50周年記念委嘱作品）が、同年11月に大野和士と同楽団により東京で初演、そのヨーロッパツアーにおいて各地で初演された。16年1月、東日本大震災後の福島をテーマとしたオペラ『海、静かな海』（原作、演出＝平田オリザ）がハンブルクで初演された。17年12月、アンサンブル・アンテルコンタンポランの委嘱によるオペラ『二人静―海から来た少女―』を演奏会形式で初演。18年7月にはシュトゥットガルト州立劇場で新作オペラ『地震・夢』を初演予定。01年にドイツ・ベルリン芸術アカデミー会員に選出。東京交響楽団1998-2007、ベルリン・ドイツ交響楽団2006/2007シーズン、西ドイツ放送合唱団06-08シーズン、ネーデルラント・フィルハーモニー管弦楽団13/14シーズンのコンポーザー・イン・レジデンスを歴任。12年、ドイツ・バイエルン芸術アカデミーの会員に選出。紫綬褒章受章。武生国際音楽祭音楽監督。



【演出・振付】サシャ・ヴァルト

Sasha WALTZ

ドイツ、カールスルーエ生まれ。アムステルダムとニューヨークで学び、1993年にベルリンでヨッヘン・サンディックと共にサシャ・ヴァルト&ゲッツを設立。2000年にはシャウビューネ芸術監督に就き、『ケルパー（身体）』『S』『noBody』、インスタレーション『insideout』などを創作。05年1月、初のコレオグラフィック・オペラ『ディドとエネアス』がベルリン州立歌劇場で初演。07年5月、音楽作品『メディア』がパスカール・デュサパン音楽、ハイナー・ミュラー台本で、2007年度ヨーロッパ文化首都の演目としてルクセンブルクで初演。同年10月にパリ・オペラ座でベルリオーズの交響曲『ロメオとジュリエット』を発表。08年、舞踊プロジェクト『Jagden und Formen』はヴォルフガング・リームが作曲、アンサンブル・モデルン演奏によりフランクフルトで初演。09年3月、サシャ・ヴァルト&ゲッツは『ダイアログ09―ノイエス・ムゼウム（新しいミュージアム）』をデビット・チッパーフィールドが改築したベルリンの新美術館で上演。ローマのドイツ文化機関ヴィラ・マッシモの助成を受け、09年11月にローマで、建築家ザハ・ハジド設計の新現代美術館落成にあたり『ダイアログ09―MAXXI』を発表。10年、振付作品『Continu』がチューリヒで初演、次いでコレオグラフィック・オペラ『パッション』がパスカール・デュサパン作曲で、シャンゼリゼ劇場で初演された。11年5月に細川俊夫『松風』が世界初演。12年1



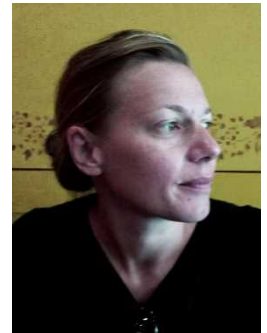
報道用資料

月、マーク・アンドレとの舞踊コンサート『ゲファルテット』がザルツブルグ・モーツァルテウム・モーツァルト・ウィークで初演。12年5月にベルリン・フィルハーモニー管弦楽団の教育プログラム『MusicTANZ・Carmen』の振付を依頼され、ロディオン・シチェドリンの『カルメン組曲』を100人の生徒と共に上演。13年にはストラヴィンスキー『春の祭典』に振り付けた『祭典』をマリンスキー劇場バレエでゲルギエフ指揮により初演。ドイツ初演は同年10月にベルリン州立劇場でサシャ・ヴァルツ&ゲスツ出演、バレンボイム指揮で行われた。バレンボイムとは14年4月に『タンホイザー』をベルリン州立歌劇場のプロダクションとしてシラー劇場で初演。14年9月、ネザーランド・オペラ、ルクセンブルク大劇場、ベルゲン音楽祭などの共同制作により、モンテヴェルディの『オルフェオ』をアムステルダムで初演。カロリン・ノイバー賞、フランス文化省芸術文化勲章、ドイツ連邦共和国メリット勲章を授与されている。13年よりベルリン芸術院会員。13年、サシャ・ヴァルツ&ゲスツはEUよりヨーロッパ文化大使に任命された。19年よりベルリン州立バレエ芸術監督に就任予定。

【美術】ピア・マイヤー＝シュリーヴァー

Pia MAIER SCHRIEVER

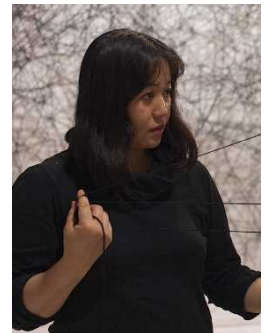
シュトゥットガルトに生まれ、建築学をシュトゥットガルトの国立視覚芸術アカデミーとロンドンのバートレット建築学校で学ぶ。ベルリンのhg merz、ニューヨークの1100アーキテクト、ベルリンのザウアーブルッフ・ハットン建築事務所に勤務。2004年、ベルリンに建築と舞台美術デザインを行うアトリエ事務所を立ち上げた。サシャ・ヴァルツとのオペラとダンスのための舞台美術は、2007年のパリ・オペラ座『ロメオとジュリエット』に始まり、10年にはチューリヒのシャウシュピールハウスで『Continu』、11年ブリュッセルのベルギー王立モネ劇場で『松風』、そして12/13シーズンにはベルリン州立歌劇場のレパートリーを手掛け、13年にミラノ・スカラ座にて『ロメオとジュリエット』をデザインしている。13年にはローマにあるドイツのヴィラ・マッシモ・アカデミーより助成を与えられた。現在、ローマとベルリンを拠点に活動。2014年にはサシャ・ヴァルツ演出『タンホイザー』の舞台美術も担当している。



【美術】塩田千春

SHIOTA Chiharu

1972年大阪府生まれ。ベルリン在住。生と死という人間の根源的な問題に向き合い、「生きることとは何か」、「存在とは何か」を探索しつつ大規模なインスタレーションを中心に、立体、写真、映像など多様な手法を用いた作品を制作。2007年、神奈川県民ホールギャラリーの個展「沈黙から」で芸術選奨文部科学大臣新人賞受賞。15年、第56回ヴェネチア・ビエンナーレ国際美術展の日本館代表として選出される。主な個展に、KAAT 神奈川スミソニアン博物館アーサー・M サックラーギャラリー（14年）、高知県立美術館（13年）、丸亀市猪熊弦一郎 現代美術館（12年）、国立国際美術館（08年）など。シドニービエンナーレ（16年）、釜山ビエンナーレ（14年）、瀬戸内国際芸術展（11年）などの国際展にも多数参加。また、サシャ・ヴァルツ演出・振付『松風』をはじめ舞台作品も多く、キール歌劇場『トリスタンとイゾルデ』（14年）、キール劇場『冬物語』（16年）を手がけたほか、17年3月にはキール歌劇場『ジークフリート』新制作の美術も予定されている。新国立劇場では演劇『タトゥー』（09年）の美術を担当した。



【指揮】デヴィッド・ロバート・コールマン

David Robert COLEMAN

ロンドンのロイヤルカレッジでピアノと指揮、ケンブリッジのキングスカレッジで楽曲分析を、ジョージ・ベンジャミン及びヴォルフガング・リームのもと作曲を学ぶ。南西ドイツ放送交響楽団、エクサンプロヴァンスでピエール・ブーレーズ、バイエルン州立歌劇場でケント・ナガノ、ベルリン州立歌劇場でダニエル・バレンボイムのアシスタントも務める。2000年、フランクフルト歌劇場国際作曲コンクール入賞。フランクフルト放送交響楽団、南西ドイツ放送交響楽団、ブレーメン・フィル、バイエルン州立歌劇場、ベルリン州立歌劇場、フィルハーモニー管弦楽団、モントリオール交響楽団などに指揮者として招かれ、ジェラルド・バリ『The Road』、フィリップ・マヌリ『Abgrund』、クセナキス『Kai』、ブーレーズ『messages erquisses』ヴィオラ版の世界初演を指揮。10年からベルリン州立歌劇場指揮者兼作曲家となり、『キャンディード』『放蕩者のなりゆき』、シャリーノ『Luci mie traditrici』新演出公演などを指揮。フランクフルト歌劇場に『Herzkammeroper』を、アンサンブル・アンテルコンテンポランに『Deux』、モントリオール交響楽団にクラリネット・ラプソディ『Ibergang』を作曲。作品の多くは、自身の指揮でフランクフルト・アンサンブル・モデルン、南西ドイツ放送交響楽団、ベルリン・フィルハーモニー、フランクフルト放送交響楽団などで演奏されている。12年、バレンボイムから委嘱されベルク『ルル』のスケッチから第3幕の新版を作曲し、同年3月にベルリン州立歌劇場で初演され、ドイツ・グラモフォンからリリースされた。新国立劇場初登場。



報道用資料

【松風】イルゼ・エーレンス

Ilse EERENS

ベルギー出身。オランダのニュー・オペラ・アカデミーで学ぶ。オペラ、コンサート双方で活躍し、最近の出演にブレゲンツ音楽祭とアン・デア・ウィーン劇場のハインツ・カール・グルーバー作曲『ウィーン物語』マリアンヌ役、リヨン歌劇場のヤナーチェク『利口な女狐の物語』女狐、『ルサルカ』料理人の少年役での英国ロイヤルオペラ・デビュー、クラーゲンフルト歌劇場での『魔笛』パミーナ（ローランドデビュー）、東京都交響楽団による細川俊夫『嵐のあとに』世界初演がある。モネ劇場には定期的に出演しており、『仮面舞踏会』オスカル、『ウィリアム・テル』演奏会形式のジェミー、『サンドリオン』ネミー、エネスク作曲『エディプス王』アンティゴネ、リゲティ『グラン・マカーブル』アマンダなどに出演している。16/17シーズンはアン・デア・ウィーン劇場にドニゼッティ『エリザベッタ』マティルダ、リヨン歌劇場のオネゲル『火刑台のジャンヌ・ダルク』処女マリア、クラーゲンフルト歌劇場『魔笛』パミーナ、ポーランド国立歌劇場で細川俊夫作曲・サシャ・ヴァルツ演出『松風』タイトルロールなどに、17/18シーズンはモネ劇場『仮面舞踏会』オスカルなどに出演、今後の予定にリヨン歌劇場『白墨の輪』（ツェムリンスキー）Tschang-Haitang、ザルツブルク音楽祭『魔笛』侍女 I などがある。宗教曲や現代音楽などコンサートへの出演も多く、各地のオーケストラと共演している。新国立劇場初登場。



【村雨】シャルロット・ヘッレカント

Charlotte HELLEKANT

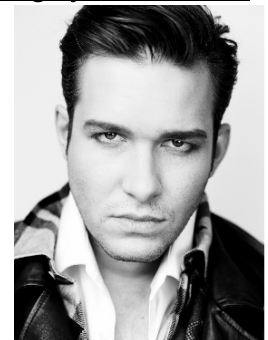
バロックから現代までをレパートリーに、オペラ、コンサートで活躍するメゾソプラノ。メトロポリタン歌劇場、パリ・オペラ座、グライントボーン音楽祭などに出演。最近のオペラではベルリン・ドイツ・オペラ『ウェルテル』シャルロット、スウェーデン王立歌劇場『カルメン』、ヘンデル歌手としてシヤンゼリゼ劇場『Semele』イノ、チューリヒ歌劇場『ジュリオ・チェザレ』コルネリアに、ザルツブルク音楽祭のカンブルラン指揮『ファウストの劫罰』、ベルゲン音楽祭のガーディナー指揮『青ひげ公の城』ユディット、サシャ・ヴァルツ&ゲスツの『オルフェオ』、モネ劇場の新演出『カブリッチョ』クレロンなどに出演。15/16シーズンにはドロッツニングホルム宮廷劇場で17世紀スウェーデンを讃える『Hedvig Leonora』をキュレーション、プロデュース、出演した。多くの作曲家にインスピレーションを与えており、細川俊夫の『松風』村雨役は彼女のために書かれた役であり、2011年のモネ劇場での初演以来、ワルシャワ、ルクセンブルク、ベルリン、リール公演に出演している。細川は続いて『大鴉』を彼女に作曲、ブリュッセル、アムステルダム、パリ、日本などで彼女自身が初演した。Mikko Heinioのオペラにおけるエリック14世役も彼女にあてて書かれ、そのツアーで特別な称賛を受けた。今シーズンはミュンヘン室内管弦楽団によるステファノ・ジェルヴァゾーニの新作初演に出演予定。新国立劇場初登場。



【旅の僧】グリゴリー・シュカルパ

Grigory SHKARUPA

ロシア、サンクト・ペテルブルク生まれ。サンクト・ペテルブルク音楽院で学ぶ傍ら、マリインスキー劇場に出演し、ゲルギエフ、テミルカーノフ、ノセダらと共演した。2010年よりボリショイ劇場のヤング・アーティスト・プログラム、2013年よりベルリン州立歌劇場の国際オペラスタジオのメンバーとして学んだ後、2015年9月よりベルリン州立歌劇場のアンサンブルメンバーとして現在に至る。これまでモーツァルト『ドン・ジョヴァンニ』マゼット、『コジ・ファン・トゥッテ』ドン・アルフォンソ、ヴェルディ『ドン・カルロ』修道士などを演じている。バレンボイム、メータ、ザネッティらと共演を重ねる、将来を期待される若手バスである。新国立劇場初登場。



【須磨の浦人】萩原 潤

HAGIWARA Jun

東京藝術大学卒業、同大学大学院修了。二期会オペラスタジオ41期修了。文化庁派遣芸術家在外研修員として渡独。ベルリン・ハンス・アイスラー音楽大学大学院を最優秀の成績で修了。第14回五島記念文化賞オペラ新人賞受賞。これまでに『ニュルンベルクのマイスター・ジnger』ベックメッサー、『フィガロの結婚』アルマヴィーヴァ伯爵、『こうもり』アイゼンシュタインなどに出演。新国立劇場では『トゥーランドット』ピン、『アラベツラ』ドミニク伯爵、『アンドレア・シェニエ』フレヴィル、『ラ・ボエーム』ショナール、『ローエングリン』王の伝令、『魔笛』パパゲーノ、『ヴォツェック』第二の徒弟職人、『イエヌーファ』粉屋の親方、オペラ鑑賞教室・関西公演『フィガロの結婚』フィガロなどに出演。二期会会員



松風

【全1幕(ドイツ語上演/字幕付)】

【公演日程】 2018年2月16日(金)19:00/2月17日(土)15:00/18日(日)15:00

【会場】新国立劇場 オペラパレス

【チケット料金】 S:16,200円・A:12,960円・B:8,640円・C:6,480円・D:3,240円・Z:1,620円

【前売開始】 2017年10月7日(土)

指揮	デヴィッド・ロバート・コールマン
Conductor	David Robert COLEMAN
演出・振付	サシャ・ヴァルツ
Production and Choreographer	Sasha WALTZ
美術	ピア・マイヤー＝シュリーヴァー、塩田千春
Set Design	Pia MAIER SCHRIEVER, SHIOTA Chiharu
衣裳	クリスティーネ・ビルクレ
Costume Design	Christine BIRKLE
照明	マルティン・ハウク
Lighting Design	Martin HAUK
ドラマツルグ	イルカ・ザイフェルト
Dramaturgy	Ilka SEIFERT
松風	イルゼ・エーレンス
Matsukaze	Ilse EERENS
村雨	シャルロッテ・ヘッレカント
Murasame	Charlotte HELLEKANT
旅の僧	グリゴリー・シュカルパ
Der Mönch	Grigory SHKARUPA
須磨の浦人	萩原 潤
Der Fischer	HAGIWARA Jun
音楽補	富平恭平
General Music Staff	TOMIHIRA Kyohei
ヴォーカル・アンサンブル	新国立劇場合唱団
Vocal Ensemble	New National Theatre Chorus
管弦楽	東京交響楽団
Orchestra	Tokyo Symphony Orchestra
ダンス	サシャ・ヴァルツ&ゲスト
Dance	Sasha Waltz & Guests
芸術監督	飯守泰次郎
Artistic Director	IIMORI Taijiro

A production by Sasha Waltz & Guests commissioned by the Théâtre Royal de la Monnaie in coproduction with Grand Théâtre de Luxembourg, Teatr Wielki - Polish National Opera and in cooperation with Berliner Staatsoper.

The production »Matsukaze« is funded by the Federal Cultural Foundation. Made in Radialsystem®Sasha Waltz & Guests is funded by the state of Berlin and the Hauptstadtkulturfonds.

予定上演時間: 約1時間30分 (休憩なし)

アフタートーク 2月17日(土)公演終演後(会場:オペラパレス) 出演:細川俊夫、サシャ・ヴァルツ

入場方法: 本公演チケットをご提示ください(入場無料。ただし満席の場合制限あり) お問い合わせ: 営業部 5351-3011(代)

公演情報 WEB サイト <http://www.nntt.jac.go.jp/opera/>

【チケットのご予約・お問い合わせ】 新国立劇場ボックスオフィス TEL:03-5352-9999 (10:00~18:00)

新国立劇場Webボックスオフィス <http://pia.jp/nntt/>

【チケット取り扱い】チケットぴあ、イープラス、ローソンチケットほか

* 2席 1,620円: 公演当日朝10時より、新国立劇場 Web ボックスオフィスほかで販売。1人1枚。電話予約不可。

* 当日学生割引(50%)、ジュニア割引、高齢者割引、障害者割引、学生割引など各種割引あり。* 未就学児入場不可。

新国立劇場 WEB サイト <http://www.nntt.jac.go.jp> 東京都渋谷区本町1-1-1 京王新線新宿駅より1駅、初台駅直結。